

おはなしの光

大塚 喜一

おはなしはこれを外より見れば話者が語るのが主であり、幼兒達は之に従つて聽くやうに思はれるが、決して話者一人の力によつて多くの幼兒達をあの様に熱心にきかせ得るものではなく、實は幼兒がきくからおはなしが出来るのである。この事は、良き物語をすなほに話すとき、幼兒の心から直接我等へ迫り来る純なる生命の流れを感じるころに最も鮮明に會得せられる。凡そ人間の神より興へられたる至純なる姿をそのまゝに示せてゐる幼兒の生命の流れを受けて、話者は話すにあらずして實は話さしめられる者である事を、我等は常に體驗し得るのである。この體驗あらしむる根源に反省する時、吾人は話者として立つべき根本に到達する。そは、神の子たる人間をその本然の姿の純なるまゝに生かしてゐるこの生命に合流し歸一して一意専心「聽く子」俱に一心に「語る外」に何等餘念なき境地である。「註参照」この至境に於ては、幼兒の純なる生命の動きは話者の生命と一味となつて動くから、舊き話者の亂れや曇り等は餘すところなくこの一味の生命の中に融け去り、新らしき話者の清くすこやかなる姿は、刻々に幼兒達から話者へ乗り移りゆく力によつて創り成されてゆくのである。話者が幼兒達から受くるこの新らしき生命の力は、おはなしの進行にともなひ話者に増し加へられ積み重ねられて行くの

であるから、かゝる佳境が幸にも不斷に繼續して遂にその統一の純熟する所おはなしの眞景はこゝに具體現して話者は自分でも不思議なほき光にみち／＼と語り得るのである。話者としてのかゝる快心の體驗は、その一回が他の何回の經驗にも増して格別に自己を力づけてくれること、實に我ながら驚くの外はない。これをたまへて云へば、恰も語る我は聽く幼兒達の中に没してその中より新たに生まれ出づるが如く、舊き自己は幼兒達より照射し来る光の焦點に焼きつくされてその白熱の中より新たな自分として出直してゆくにも似たる姿である。かくして我等の拙きを以てしても猶幼兒「俱」に語り得しよろこびを披瀝して「おはなし」は子供からきくものである。「こ」叫ばざるを得ないのである。幼兒がおはなしを求め、一心に聽き入るあの姿こそは、話者をして語らざるを得ざらしむるものであり、大人の想ひ及ばざる清き生命の泉の湧くを示すものであらう。(皇紀二千六百年一月三十一日)

「註」こは「語る」と「聽く」との兩相の分れ出づる頂點であり話者自ら幼兒の如き心を以てお話の精神に反省すべき本源の地である。この人間本態の子心にかへるところから、内へ向つて自己を教育する事も可能となるのである。それ故にお話の精神(教訓)を相手に貫徹せしめ感受せしめむと欲する者は、茲に自己を没するの修行が第一となるのである。(二月十二日附記)